2022年度　ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。

（A）ジェンダーフォーラム論文賞

対　　象：学部学生・大学院生（個人・団体）
支 給 額：優秀：10万円、佳作：5万円
採用件数：1～4件
選考方法：論文審査
提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書＊
②論文（日本語2万字以内の未発表論文）
備　　考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

書類提出期間：2022年 10月 1日（土）～2022年 10月 31日（月）まで
書 類 提 出 先：ジェンダーフォーラム（gender@rikkyo.ac.jp）に添付ファイルで提出
採　用　発　表：11月 21日（予定）学生課奨学金掲示板（池袋／新座）、10号館連絡通路掲示板、立教時間、フォーラム HP に掲示予定
授　　与　　式：12月上旬（予定）

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】
標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文･報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。
以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー：立教大学における個人情報の取扱について」（https://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/）に準じる。
※ (B) 活動・研究助成金の募集は終了しました。
詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス６号館１階）　Tel：03-3985-2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
＊申込書、願書はホームページ上からダウンロードできます。（http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/）

2022年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金 B 奨学生決定!

2022年４月に募集いたしました (B) 活動・研究助成金には３件のご応募があり、５月 17日に開催された選考委員会において、１件に助成金を授与することを決定いたしました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金 (B) 活動・研究助成金選考結果

奨学生氏名（所属）	研究課題	支給額
王　ナオミ（現代心理学部心理学科４年）	「日本における若年女性が対象の肥満偏見の認知処理負担の検討」	20万円

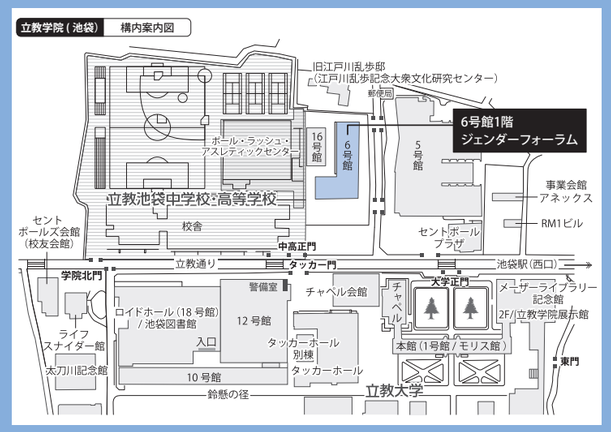
立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ（性自認･性的指向など）についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー（gender）とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女／男らしさ」「女／男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念･制度･規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館（1998年閉館）の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として 1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

開　室　日：毎週月曜日～金曜日　※秋学期は金曜閉室
開 室 時 間：10：00～16：00
※新型コロナウィルス対策のため、一時的に開室日時を変更する可能性がございます。詳しくはホームページをご確認ください。
場　　所：立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL：03－3985－2307
E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/

６号館１階奥から入口付近のスペースに移転しました！

Gender Forum Rikkyo University



GEM

Vol.47 2022.10.01
Rikkyo Gender Forum News Letter

Gender Forum Rikkyo University

Gem とは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館（1998年閉館）の “M” にちなんだものでした（Gender Encountering in Mitchell）。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味する Gender Equality in the Making とし、ニューズレター、メーリングリストの名前として使用しています。

ジェンダーフォーラム 2022年度公開講演会（2022年６月 28日（火））

「ケアの倫理の源流へ――軋轢／葛藤／抑圧のなかのケア」

登壇者：岡野八代氏（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員）

ケア論の代表的研究者として著名な岡野八代先生の今回の講演では主に、ケアの倫理とフェミニズム、そして、ケア対正義という二項対立の問題性について論じられた。ケアの倫理の源流はフェミニズムにあるにもかかわらず、その事実がアカデミアにおいても軽視されている現況がある。本講演はフェミニズムの深い理解を欠いたケア論への批判、あるいは是正処置であり、関連書籍も近日中に刊行されるとのことだ。コロナ禍を経てケア論への関心がさらに高まっているからこそ、一面的・図式的な理解がもたらす危険について警鐘を鳴らす本講演の重要性は強調してもし過ぎることはない。

以下、講演内容を要約する。正義の倫理対ケアの倫理という二項対立、あるいは正義「か」ケアかという二者択一は、それ自体ジェンダー化されており、男女二元論を補強してしまう。さらに、ケアを親密な個人同士の慈悲や自己犠牲の形式とし、独立し自律した主体（市民）同士の関係性を扱う正義論を補完するものとする見方は、まさに新自由主義社会におけるケアテイカーの搾取を正当化するものであるとして、退けられなければならない。正義とケア、という安易な二分法が不可視化するのは、フェミニズム自体が正義を目指す運動・理論であるという事実であり、ケア論はその文脈の中で捉えられなければならないということだ。また、最後の質疑応答でも強調されていたように、個々の具体的な状況において行われるケア実践そのものが、正義への考慮を絶え間なく要請するのである。ケアのパースペクティブに基づき、人が人間や自然といったあらゆる他者への依存なしには生きられないという事実を踏まえた上で、関係性に根差した正義を構想することが求められている。

また、岡野先生は新田啓子先生の「依存者の詩学」に関する論考（『群像』2022年７月号）に触れながら、ケア実践における非対称な権力関係に潜む暴力の問題に社会が向き合うこと、そして、非暴力への要請が満たされ得る社会を構築することの重要性を喚起する。岡野先生の著作『フェミニズムの政治学――ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012年）から引用すると、「傷つきやすさ vulnerability における不均等をなくすこと、それが、ケアの倫理から提起される、社会で分有されるべき責任」なのだ（161）。加えて、岡野先生が 15年以上読み続けているテクストである、キャロル・ギリガンの『もうひとつの声――男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』（1982、翻訳版 1986）は、中絶するか否か、というジレンマに立たされた女性たちの生の声を研究対象としている。ロー対ウェイド判決が覆された今、ケア論の源流であるフェミニズムに立ち返る必要性はこれまでになく高まっている。

筆者は一研究者として、講演内容はもちろんのこと、様々な重要テクストが丹念かつダイナミックに分析・解釈される様子に感銘を受けた。原文にあたり、粘り強く、テクストと正面から向き合うこと。精読はテクストに対するケアなのであり、多大な忍耐、労力、そして勇気を必要とする。本講演を聞き、研究者としての責任の重さを再認識すると共に、フェミニズムを学ぶ者として、心を奮い立たされた。

中村麻美（本学文学部英米文学専修助教）

第86回ジェンダーセッション（2022年5月27日（金））

グローバルな市場・企業とジェンダー・ダイバーシティ

登壇者：治部れんげ氏（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授）

治部れんげ氏による講演は、ジェンダーフォーラム所長であるゾンターク氏の紹介を呼び水にして、日本におけるフェミニズム思想の原点とも言える社会主義者山川菊栄が1918年に発表した女性論の次の文章を引用することから始められた。「私は男子を妻子扶養の具たる運命より解放するとともに、女子を家庭より解放し、男女相携えておのおの自己の適する社会的労働にも従えば、子女の養育にも任じ得る社会の実現を希望する。」（『新装増補　山川菊栄集　評論篇　第一巻』岩波書店、2011年、173-174頁。）　なお、山川はこの文章の前の箇所で、性別役割分業は男女からその天分を伸ばす機会を奪い、それゆえに人はその境遇に不満を抱え、社会も家庭もよきものとならず、人類の進歩も阻まれがちであると批判している。山川の考えは現在の「ジェンダー平等」の考えにも通底している。

日本政府は20年以上「男女共同参画」に取り組み、「女性活躍」を推進している。しかし、山川の希望には未だ道遠く、その批判も未だ的を射ていると言えよう。また、所謂「女性活躍」という言葉にはモヤモヤしたものを感じる人も少なからずいよう。経済に注力することによって人が生産性に還元されてしまっていないか。注目するのは「女性」だけでよいのか。何を目標としていて、何が問題であり、どうすればよいのか。

現在のビジネスを取り巻く国際環境は短期的な利益追求を反省し、売り上げ・利益・株価収益率などの財務諸表以外に着目するようになった。長期的な成長を目指し、環境・社会・ガバナンスに配慮した経営（ESG経営）へと方向転換をしたのである。機関投資家の投資判断において国際的な人権規範も重要なものとなった。人権問題に取り組むには、その問題によって苦しめられている当事者が意思決定層にいることが重要である。意思決定層が多様であることが必要である所以である。ジェンダー平等において、その当事者の代表は先ずは女性であろう。そして女性の解放の動きは、性の別によらず既存の「当たり前」に苦しめられている全ての人の解放へと繋がっていくことが期待されている。全ての人が天分を伸ばせることが社会の成長への鍵なのである。

こうした視点の変更がなければ、日本の企業は海外から置いて行かれてしまいかねないと治部氏は懸念を示す。治部氏の著書のタイトルにもあるように、ジェンダーはビジネスの新教養なのである。既存の「当たり前」に固執するのではなく、次世代のためにどのような未来にしていきたいか。治部氏の講演は、そうした想い／願いの先を模索する道を示してくれた。

鳥居雅志（本学兼任講師）

「多様なセクシュアリティへの理解と環境整備について考える会」の活動総括

セクシュアルマイノリティ学生への支援が、学生の目に見える形で行われていないのではないか。このことを課題として掲げ、2018年8月、立教大学の有志の教職員により、「多様なセクシュアリティへの理解と環境整備について考える会」が発足した。その後、本会は、R-CAPという人事課の研修制度のプロジェクトの一環となり、2022年3月まで活動を続けた。私は、2019年9月から本会のメンバーとなっており、幾つかの活動に携わった。今回は、その活動について紹介する。

① 他大学の取り組み調査

2019年度に、国内13大学の「多様なセクシュアリティに関連する学生への支援状況」を調査し、立教大学と比較して、『立教大学が対応できている事項・未対応の事項』を整理した。この調査を通じて、立教大学がまだ実施できていない取り組み（例えば、大学としてのガイドラインや相談窓口の設置、また教職員に対する研修など）に気付くことが出来たと考えている。

② 学内構成者へのアンケート調査

2019年度から2021年度にかけて、全3回に渡り、立教大学の構成者へのアンケート調査を実施した。はじめに全職員を対象としたアンケート、次に全学生を対象としたアンケート、最後に全教員を対象としたアンケートの3つである。アンケートの中では、それぞれ回答者に対して、多様なセクシュアリティについての意識調査や、大学への意見、または何か困っていることは無いかなどを尋ね、自由形式で回答していただいた。この調査では、より具体的な立教大学としての課題に気付くことができたと考えている。

本会では、この様な地道な調査活動を続け、その結果を立教大学の全学的な会議体にて報告した。このことにより、学内の多くの構成員に対して、改めて、多様なセクシュアリティについて考える機会を提供できたと考えている。加えて、立教大学が今後対応すべき事項や方向性を整理することができたとも考えている。そして、2021年度からは、学生部を中心とした「多様なセクシュアリティへの対応に関する検討ワーキンググループ」が立ち上がり、現在は、こちらのワーキンググループが立教大学の公式な活動主体として、活動を続けている。こうした活動を通じて、今後も立教大学の構成員が多様なセクシュアリティへの理解を深め、全ての学生・教職員にとって過ごしやすい大学になることを願っている。

青木佑馬（ジェンダーフォーラム運営委員／本学職員）

2021年度・2022年度コラボレーション科目のご紹介

2021年度の秋学期にジェンダーフォーラムが提案した全学共通カリキュラムコラボレーション科目「ジェンダー・宗教・社会」が開講されました。本科目はジェンダーフォーラム所長ミラ・ゾンタークと兼任講師工藤万里江が共に担当し、日本社会において見逃されがちなジェンダーと宗教との深い関わりに焦点を当てたものです。担当教員による講義に加え、神道（平藤喜久子氏）・仏教（丹羽宣子氏）・イスラーム（小野仁美氏）、キリスト教（堀江有里氏）を専門とする先生方をゲストスピーカーとして招き、それぞれの宗教においてジェンダーやセクシュアリティを巡ってどのような課題があるのかをご教示いただきました。またこれらの講義と並行して、近年の新聞報道から宗教とジェンダーに関わる課題を選び、それを題材に受講生たちとディスカッションをすることで、現代社会における宗教とジェンダーの力学を読み解くことを目指しました。講義やディスカッションで取り上げられたテーマは、聖典や教義と女性・性的マイノリティ差別、宗教内の性別役割、「伝統・文化」と差別、「信教の自由」をめぐって、また各宗教内における変革実践など多岐にわたりました。

さらに2022年度の秋学期にはこの発展編として立教ゼミナール「フェミニズムの現代的諸課題」が開講されます（担当・工藤）。広く宗教とジェンダーとの関わりを知ることを目指した昨年度のコラボ科目からの発展編として、本ゼミでは「フェミニズム」にぐぐっと焦点を絞り、その現代社会との折衝を深掘りしていきます。まずフェミニズムの歴史や発展をめぐる基礎知識を身につけたうえで、現在フェミニズムが内包／対峙している諸課題（国家や経済との関係、身体、リプロダクティブ・ライツ、宗教等々）を取り上げて共に学ぶ予定です。講義を中心とした昨年度のコラボ科目とは異なり、ゼミナールとして開講される今年度は受講生たちによる研究発表を中心としますが、各テーマにおいて主軸とするべき文献をあらかじめ示したうえで、各自の興味関心に従ってさらに資料を加えてもらう方式をとります。また女性の労働問題を専門とする栗田隆子氏やリプロダクティブ・ライツを専門とする大橋由香子氏、そしてキリスト教を専門とする安田真由子氏をゲストスピーカーとして招く予定になっています。

フェミニズムに強い関心を持っている方にはもちろん、「フェミニズムってなに？」と素朴な疑問を持っている方にもぜひともご参加いただきたい科目です。

工藤万里江（本学兼任講師／明治学院大学キリスト教研究所客員研究員）